

「児童文学とジェンダー」の報告

目 黒 強

1. 企画について

本テーマセッションは、研究交流委員会により学術交流を目的として企画されたものである。当初は日本子ども社会学会第25回大会で実施される予定であったが、西日本豪雨により同大会が不参集となった。その後、大会校のご尽力により、2018年12月2日に武庫川女子大学にて開催された研究集会で実施の運びとなった。

コーディネイターは研究交流委員会委員の稿者（神戸大学）、司会は同委員で関西大学の多賀太会員が務め、話題提供者として兵庫県丹波市立春日部小学校の教員である足立まな氏と稿者の二人が登壇した。なお、登壇予定であった児童文学作家のひこ・田中氏はご病気によりご登壇いただくことができなかった。

企画の趣旨は下記の通りである⁽¹⁾。

児童文学は、子どもに加え、子どもに本を手渡す媒介者（保護者、教員など）を読者対象としたジャンルである。このようなジャンル特性ゆえに、児童文学には子どもの社会化が期待されてきた。その一方で、社会化からの子どもの解放を試みる児童文学作品も認められる。このような社会化をめぐるポリティクスは、とりわけ、ジェンダーをめぐる生じていると考えられる。

そこで、本テーマセッションでは、ジェンダーの観点から児童文学作品に描かれた子ども像や児童文学作品が手渡される現場の課題と可能性につ

(めぐろ・つよし 神戸大学大学院)

いて議論したいと考えた。児童文学研究でも、ジェンダー研究は蓄積されつつあるが、その多くは少女が対象であり、少年については十分に検討されておらず、トランスジェンダーや同性愛などの多様な性についてはほとんど検討されていない（エス＝女学生同士の強い絆を除く）。したがって、今回のテーマセッションでは、少女のみならず、少年や LGBT を視野に入れ、議論を拓きたい。

話題提供者として、児童文学作家のひこ・田中氏、小学校教員の足立まな氏、児童文学研究者の目黒強会員にご登壇いただき、それぞれの立場から本テーマについて話題をご提供いただくとともに、立場を超えて議論を拓げたり深めたりできればと思う。

児童文学を導きの糸にしながら、ジェンダーが再生産されたり、更新されたりするポリティクスについて、文学研究者や教育関係者はもちろんのこと、関連領域をご専門とする方々とともに学术交流できればと思う。

当日は以下の流れで進行した。コーディネーターが企画の趣旨を説明し、司会が話題提供者の立ち位置等を補足した後、足立氏と稿者が話題を提供した。その後、多賀会員によるメディアとジェンダーについての補足説明を経て、フロアの方々の質疑応答を行った。

なお、紙幅の都合、話題提供者による報告については抄録とし、質疑応答等については割愛せざるを得なかった。トランスジェンダーが表層的理解に止まったり、商機として利用されたり、反発を招いたりする局面などをめぐって、フロアとの質疑が活発に交わされたことを申し添えておく。

2. 足立まな「絵本と学ぶ性の多様性－授業実践をとおして－」の抄録

丹波市立春日部小学校から来ました足立まなです。今日は、授業実践を発表させていただきます。

小学校1年生のジェンダー平等教育の授業で、この絵本、『わたしはあかねこ』⁽²⁾を使いました。

多様な性の学習を低学年でどのように進めていくか考えていた時、この絵本

との出会いがあり、この絵本と学びたいと思ったからです。また、挿絵のねこたちがとても愛らしく、子どもたちに身近な「色」をテーマとしていることから、お話に入りやすく自分事として捉えやすいであろうと考えました。

この授業を、私は2回しています。1回目は去年の秋、そして、2回目は今年の7月です。今日は、7月の授業を中心にお話したいと思います。入学して3カ月の子どもたちですから、感想の言葉の表現はまだ幼いですが、お許しください。

第1時は、この絵本のお話を使って授業をし、第2時は、絵本の続きを考え、展開しました。

では、皆さん、童心に戻って、絵本の世界をお楽しみください。

(絵本『わたしはあかねこ』の朗読)

この絵本の中では主人公は「あかねこちゃん」と呼ばれていますが、「あかねこさん」と今日は言います。入学当初から、友だちを「さん」で呼ぶとくみをしていて、この授業をした時、「～ちゃんはおかしい。」と児童が言ったからです。「さん」づけの意味は、男女ではなく、ひとりの人として見ていくことと、20人に1人いると言われている性的マイノリティの子どもたちの気持ち（「ちゃん」や「くん」で呼ばれたくない）を考えてです。

第1時は、あかねこさんの家族からのきめつけによる息苦しさと、あかねこさんと出会ってありのままを受け入れてもらう安堵感という、二つの気持ちの変化に気づかせることをねらいました。

【第1時】の学習活動⁽³⁾

1. 本時の流れを知る。
2. 絵本「わたしはあかねこ」（前半：家を飛び出すところまで）を見る。
3. 話の内容をふりかえりながら、あかねこさんの気持ちをはっきりさせる。
4. ワークシートを書く。
 - ・家を飛び出した時の気持ち
5. 絵本の後半（新しい家族ができるところ）を読む。

6. あかねさんと出会った時や、子どもたちが生まれた時の、あかねさんの気持ちを考える。

「赤い毛並みをほめてもらって嬉しい。」「きっと、子どもたちの色を変えようと思わなかったよ。」「とっても嬉しそうだね。」

7. ワークシートを記入する。
 - ・あたらしい家族ができた時の気持ち
 - ・あかねさんへの手紙

小さなあかねさんになれるのが1年生。すばらしいですね。自分がされたら……とか、自分だったら……と自分事として考える姿が見られました。

授業後の感想として、家を出た時は「わたしはしろねこにもくろねこにも、なりたくないわ。」「あかねこのほうがいいな。」「(きめつけられて)かなしいな。」「わたしはつくづくいやになった。」、それから新しい家族と会った時は「あかねこさんにあえてうれしいな。」「きっとできるとおもっていたよ。」「このかぞくのほうがいいな。」「うれしいね。たのしいね。いっしょにあそぼうね。」などがありました。

第2時では、生まれたねこたちの性別を考えることをきっかけに、「多様な性」について知らせることをねらいとしました。初めて出会うテーマなので、子どもたちの素直なつぶやきを大切にしながら、柔軟に展開しました。

【第2時】の学習活動

1. 本時の流れを知る。
2. 絵本「わたしはあかねこ」を見る。
3. 絵本「わたしはあかねこ」の最終場面を見て、それぞれの性別を考え、意見を言う。

「見ただけでは、わからないな。」
4. 性別は、心の性別できまることを知る。
 - ①体の性別について知る。
 - ②心の性別について知る。
5. 性が多様であることを知る。

6. ワークシートを書く。

- ・水色ねこの気持ち
- ・まわりのねこたちはどんなねこか。
- ・今日思ったこと、初めて知ったこと。
「尋ねないとわからない。」「心の性を大切にしたらいい。」

絵本では、こねこが7匹生まれたところで終わっています。第2時は、この続編を作り、この虹色のこねこたちの性別を考えました。

水色ねこさんだけ、体の性と心の性が違っています。子どもたちは、体の性から性別を決めようとします。しかし、水色ねこさんの心の性が予想通りではないことから、見かけではわからないことに気づきます。「見かけ、つまり体の色・体の性」とは別に、心の性があること、性は自分で決めるものであることを知らせていきました。

7月にした授業では、掲示するねこたちに、しあわせそうな表情をつけ、「どうして幸せなのか」という問いを投げかけ、水色ねこの気持ちと、まわりのねこたちの気持ちを考えられるように、指導案を修正しました。

授業後の感想として、水色ねこさんの気持ちは「ここにうまれてよかった。」「うれしいきもち。」「こころがおとこのこでも、みんなやさしいからよかった。」「しあわせなきもちでいたい。」、まわりのねこたちはどんなねこかなと尋ねると「すごくやさしいねこだった。」「かぞくみんなだいすきなきもち。」「みんながやさしかったからよかった。」「うれしいね。ここにうまれてよかった。」などの感想が出ました。

昨年秋の授業後の感想には、「じぶんのおもいどおりにすればいいんだよ。(じぶんのおもいをたいせつにしていんだよ。)それぞれ、きもちがちがうよ。」というものもあり、心が動いた様子がうかがえました。「私は私でいい」と感じた子がいたら、何よりです。相談できる子に、そして、相談された時、傷つけない子に育ってほしいと思います。

授業の後の生活の中で、今までの思い込みを打ち消すような発言も見られるようになりました。「男と男がデートしてもいいんやな、先生。」「先生はどっちなん?」……オープンに話せる雰囲気が必要だと感じています。

今回、この絵本の持つ大きな力を借りて、子どもたちと学ぶことができ本当に良かったと思います。1年生から、多様な性について学ぶことの必要性を感じるとともに、系統立てて学習を積み重ねることや、ひとつの授業を土台にして次につなぎ、よりよい授業をつくっていくことの大切さを感じています。

指導案について言うと、同じ指導案を使っても、同じ授業はできません。子どもたちの実態が違うのはもちろんのこと、教師の持っているものも違うからです。私たちは、子どもたちの前に立つ以上、アンテナを高くすることと、ジェンダーに敏感な視点を磨き続ける必要があると、思います。そして、とにかくカリキュラムに位置付け、授業を試みるのが大切だと感じています。

ジェンダー平等教育はいのちの教育。誰もが個性と能力を発揮できる社会、誰もがしあわせを感じて生きていける社会につながっています。

小さな一歩が子どもたちのしあわせにつながっていくことを信じて、頑張っていきたいと思います。

3. 目黒強「児童文学の正統化とジェンダー—男の子像の揺らぎに着目して—」の抄録

まずは、私の問題関心から話させていただきます。

問題の所在の一つ目は、児童文学の正統化にかかわるものです。『ぼくたちのリアル』（戸森しるこ、講談社）という作品が2017年度青少年読書感想文全国コンクールの課題図書に選ばれました。同書は講談社児童文学新人賞を受賞し2016年に書籍化された作品で、同性に恋心を寄せる小学五年生が登場します。このような作品が課題図書として正統化されたことの意味について考えてみたいと思いました。

問題の所在の二つ目は、日本児童文学におけるジェンダーにかかわるものです。フェミニズムあるいはジェンダーの観点から日本の児童文学作品が研究されたり日本人作家によって作品が手がけられたりするようになったのは、1990年代以降のことです。産む性として女の子像が再生産されてきた局面を指摘した横川寿美子『初潮という切札』（JICC 出版局、1991年）を皮切りに、『日本児童文学』という雑誌でジェンダーの特集が組まれるとともに、ひこ・田中さ

んが『カレンダー』（福武書店、1992年）で非血縁家族を通して三世代の女性が自らの生き方を問い直す姿を描いたり、『ごめん』（偕成社、1996年）で小学生男子の性の目覚めや戸惑いを描いたりしたのが1990年代でした。とりわけ、作家が数多く加入している日本児童文学者協会の機関誌である『日本児童文学』で「児童文学とフェミニズム」（1992年5月号）や「女の子・男の子の描かれ方」（1995年11月号）という特集が組まれたことは、作家にジェンダーを自覚させる点で注目に値すると考えます。

しかしながら、特集「女の子・男の子の描かれ方」では、きどりのきさんとひこ・田中さんを除けば、男の子の描かれ方についてはほとんど言及されていませんでした。さらに、藤本恵「児童文学の描く性」（『日本児童文学』2016年11・12月号）が指摘しているように、性の多様性を描いた日本の児童文学作品は2010年代の現在でも多くはありません。

以上のような理由で、本報告では、性の多様性を視野に入れながら、日本の児童文学作品における男の子像の揺らぎに着目することとしました。

それでは、正統化された児童文学作品を検討していきたいと思います。まずは、青少年読書感想文全国コンクールの課題図書に選ばれた二作品を検討します。

一つ目は、第41回の課題図書に選ばれた『サッコがいく』（泉啓子、童心社、1994年）という作品です。この作品には、野球が好きな活発な女の子の「サッコ」とおままごとが好きな弟が登場します。「サッコ」は母親から女の子らしい振る舞いを求められることに「ひどいさべつだ」と反発する一方、「ちょっとおかしいんじゃないの」のように弟の男の子らしくない振る舞いを差別しています。名誉男性志向が認められる「サッコ」が弟のあり方を受け入れる姿を通して、読者もまた自らが抱えるジェンダー・バイアスの自覚を促される作品です。

ところで、「強い女の子」と「弱い男の子」のカップリングについては、児童文学を正統化する装置として最も影響力のある教科書で議論されたことがあるので、参考までに紹介しておきます。伊東良徳さんが『教科書の中の男女差別』（明石書店、1991年）で小学校国語教科書を検討した際、批判されたのが今江祥智さんの「どろんこ祭り」という教材です。タイトルにもなっている「どろんこ祭り」は田植えを終えた早乙女が田んぼの泥を男性の顔に塗るという祭

事です。

この教材では、女の子のような「三郎」と男の子のような「せっちゃん」の関係が「どろんこ祭り」を経て変質します。作中に「本来の男の子、女の子に立ちもどったみたいだった」とあり、「どろんこ祭り」はジェンダー・ステレオタイプに回収される物語であるといえますが、読者にジェンダー・ステレオタイプの自覚を促す恰好の教材であるとも考えられ、示唆的な教材であったと思います。

さて、つづいて取り上げるのは、冒頭で言及した『ぼくたちのリアル』です。主要人物は小学五年生の三人組の男の子で、クラスで人気者の「リアル」と幼なじみの「アスカ」、そして転入生の「サジ」がそれぞれに抱える悩みを描いています。「サジ」は「リアル」に告白できずに転校してしまうのですが、同性に対する好意が当たり前のように描かれていて、「アスカ」も「リアル」も「サジ」のあり方を受け入れているところが注目されます。

つづいて、文学賞を受賞した作品を取り上げたいと思います。

まずは、第8回日本絵本賞を受賞した『さらばゆきひめ』（宮本忠夫、童心社、2002年）を検討します。歌舞伎の旅芸人の一座で女形をつとめる「うめのじょう」とガキ大将の「ニカぞう」の交流を描いた作品です。注目したい点は三つあります。

一つ目は、女形を通して女装が取り上げられている点です。歌舞伎という伝統芸能を取り上げることで、時代や文化が異なれば、期待される振る舞いや身なりが変わるということを伝えているからです。

二つ目は、「うめのじょう」が当たり前のように家事と育児をしている点です。第12回日本絵本賞大賞を受賞した『おかあさん、げんきですか。』（後藤竜二・文／武田美穂・絵、ポプラ社、2006年）ではワーキング・ウーマンの母親に感謝の気持ちを告げる母子家庭の男の子が描かれているのですが、母親に部屋を片付けてもらっているなど、家事をしている場面はありません。絵本にワーキング・ウーマンが登場すること自体が珍しい点では評価されると思うのですが、『さらば、ゆきひめ』と比べると物足りない作品です。

三つ目は、ラストで「ニカぞう」がゆきひめ役を志願し演じている点です。女形のしぐさが身に付いている主人公のことを「おんなおとこだ」と馬鹿にし

ていた「ニカぞう」は男の子らしさに囚われている読者の代表であり、「ニカぞう」の変容を通して読者もまた男の子らしさを見つめ直すことが期待できるからです。

日本絵本賞受賞作にはトランスジェンダーを描いた絵本が見つからなかったので、参考までにトランスジェンダーを描いた絵本として、『くまのトーマスはおんなのこ』（ジェシカ・ウォルトン・作／ドゥーガル・マクファーソン・絵／かわむらあさこ・訳、ポット出版プラス、2016年）を取り上げたいと思います。

この絵本は、親友の「エロール」に嫌われたくなくて女の子になりたいという本心を隠していた「トーマス」という男の子が勇気を出してカミングアウトする作品です。ただし、「トーマス」以外の登場人物は人間として造形されているにもかかわらず、MtFの当事者だけが動物（のぬいぐるみ？）として造形されている点が気になりました。MtFが人間でないかのような誤解を招きかねないからです。

次に取り上げるのは、第45回日本児童文学者協会新人賞を受賞した『カエルの歌姫』（如月かずさ、講談社、2011年）です。この作品の主人公は女の子になりたい中学生です。カラオケボックスで女性のような声で歌うことでしか自己を解放できなかったのですが、歌声しか公開しないスクール・アイドルとして校内のイベントに出演することになります。ただし、主人公は自らを性同一性障害ではないと診断しており、MtFのようなラベリングが躊躇されます。むしろ、性の揺らぎを揺らぎのまま描いた作品であるといえそうです。

つづいて取り上げるのは、第5回ポプラ社小説大賞特別賞を受賞した『快晴フライング』（古内一絵、ポプラ社、2011年）です。この作品では、水泳という競技に魅せられながらも FtM であるが故に水泳を楽しむことができない中学生の襟香の葛藤が描かれています。今回の報告では「からだの性別」が男性のケースを取り上げてきましたが、「からだの性別」が女性である FtM もまた男の子像の揺らぎを示していることから取り上げました。

最後に取り上げるのは、第129回直木賞受賞作品である『4TEEN』（石田衣良、新潮社、2003年）です。この作品には同性が好きな「カズヤ」という中学生の男の子が登場するのですが、出会い系サイトで出会った大学生と性的交渉を

していたり、カミングアウトした「カズヤ」がクラスで自然に受け容れられたりしています。

文芸評論家の斎藤美奈子さんが男性同性愛者や MtF の高校生を描いた『少年と少女のポルカ』（藤野千夜、講談社文庫、2000年）の「解説」で、表題作を自らの性のあり方に悩む段階の次のステップを描いていると指摘しているのですが、『4TEEN』についても当てはまると思われます。ちなみに、『少年と少女のポルカ』の作者である藤野さんはトランスジェンダーで、男性同性愛者の日常を描いた「夏の約束」で芥川賞を受賞しています。

児童文学の場合、自らの性に悩んでいる様子が描かれていることが少なくなく、一般文芸との違いが指摘できそうです。

これまでの検討を通して考えたことを六点ほど挙げさせていただきます。

一つ目は、課題図書に選ばれたり文学賞を受賞したりすることで、作品の知名度が高まり、結果として読まれやすくなるという点です。「学校読書調査」によれば、1か月に1冊も本を読まない不読者率は中学生以降高まるようです。優れた YA 小説がメインターゲットに読まれない可能性が高いのです。したがって、知名度の上昇は10代の読書行動を促す意味で重要だと思われます。

二つ目は、正統化された児童文学作品に男の子像の揺らぎが描かれることで、当事者がエンパワーされるという点です。

三つ目は、性の揺らぎが描かれた児童文学作品は当事者ではない読者が性の多様性について学習する機会となりうるという点です。物語というスタイルは、知識として学ばせるのではなく、追体験を通して実感させる点で優れているからです。

四つ目は、性を「男性」と「女性」のどちらかに帰属されない自由を保障するという点です。いわゆる、LGBTIQ の Question の保障です。物語だからこそ、性自認の揺らぎや曖昧さをそのまま描くことができるとされます。

五つ目は、正統化の両義性についてです。『ぼくたちのリアル』を例に説明します。同性愛を描いた児童文学作品が課題図書に選ばれたことは、異性愛主義を揺るがす契機となり得ます。しかしながら、課題図書に選ばれたという理由だけで、その作品で提示されている価値観が「正しいもの」だと捉えられているのだとしたら、先に指摘した効果は長続きしません。なぜなら、同性愛を

排除した作品が課題図書に選ばれたら、その時は異性愛主義が再生産されることになるからです。もちろん、読者である子どもはそれほど単純ではありませんし、力のある作品にはそのような権威主義的な読み方を転覆する力がありますが、児童文学が正統化されることには諸刃の剣のような側面が指摘できるのです。

六つ目は、ジェンダーフリー・バッシングなどのネガティブな反応に対する懸念です。実際、ジェンダー・フリー絵本のブックガイドである草谷桂子『ジェンダー・フリーで楽しむこどもと大人の絵本の時間』（学陽書房、2002年）が公立図書館で撤去されたり（「ジェンダーとメディア 2 子どもたちへ」『朝日新聞』2017年8月6日）、公立図書館で18歳未満に対してBL小説の貸出が禁止されたりしています（「BL：男性同性愛扱った小説本、書庫のはずが開架図書 一堺市立の四図書館」『毎日新聞』（地方版・大阪）2008年11月5日）。性別主義や異性愛主義は根強く、それらの陣営からの批判は少なくないことが想定されます。たとえば、『ぼくたちのリアル』が選ばれたことで、課題図書のあり方が批判されるようなことは起こりそうな気がします。その結果、性的マイノリティが社会に受け入れられていないという現実の方が浮き彫りになり、先に指摘したポジティブな効果が相殺されてしまうことが懸念されます。

課題については山積みですが、その中から二点だけ挙げておきます。

一つ目は、作品のナラティブの検討が挙げられます。小説であればその語られ方、絵本の場合であれば絵の描かれ方などが検討されるべきだからです。

二つ目は、正統性の検証方法が挙げられます。今回の報告では、課題図書と文学賞に正統性が付与されていることを前提としていましたが、そもそも、その正統性をどのように検証すればよいのかについては本来議論されるべき方法論上の課題であるからです。

注

- (1) 「2018年度日本子ども社会学会研究集会プログラム」より転載。
- (2) 参考までに、サトシン・作／西村敏雄・絵『わたしはあかねこ』（文溪堂、2011年）のあらすじを紹介しておく。家族のなかで一人だけ赤毛である「あかねこ」が親と同じ毛色になるよう働きかける両親や自分のことをかわいそうに思っているきょうだいたちと一緒に暮らすことが辛くなって家出する。放浪の末、自分の毛色を受け入れてくれた「あおねこ」と結ばれ、七色の毛色の子ねこたちと一緒に仲良く暮らす。
- (3) 参考までに、当日配布された資料「ジェンダー平等教育 指導案」から「学習活動」の項目を抜粋した。後掲の第2時も同様。